エバリスト・カリエゴ

J・L・ボルヘス　岸本静江訳

国書刊行会

ラテンアメリカ文学叢書9　編集—鼓直

エバリスト・カリエゴ

著者——J・L・ボルヘス
訳者——岸本静江（きしもとしずえ）
定価——二〇〇〇円

本書はセイユウ写真印刷株式会社明和印刷株式会社および大口製本印刷株式会社の三社の協力により一九七八年一一月二五日印刷製本され国書刊行会（佐藤今朝夫——東京都豊島区巣鴨三—五—一八電話〇三—九一七—八二八七振替東京五—六五二〇九）により一九七八年一一月三〇日その初版第一刷が刊行された。

エバリスト・カリエゴ

J・L・ボルヘス　岸本静江訳

国書刊行会

エバリスト・カリエゴ

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongboo

エバリスト・カリエゴ　J・L・ボルヘス　岸本静江訳　国書刊行会

本書は、
鼓直（法政大学）の編集による
ラテンアメリカ文学叢書の一冊（第九巻）として
刊行された。

世界を弁明するL・E・K。

首尾一貫した要石的なものではなく、
隅石めいてひび割れた真実の一様式。
――ド・クインシー『著作集』第十一章六十八節。

序文

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongboo

わたしは長年、ブエノスアイレスのとある場末の町で、危機にさらされ目にみえてさびれていった数々の通りのある場末の町で育ったのだ、と思い込んでいた。実際には、鉄の忍びがえしの植わった柵の奥の庭で、数さえ知れぬ英語の書物を収めた書庫で、育ったのである。ナイフとギターがパレルモの辻々で幅をきかせていたと人は言うが、朝な朝なわたしを訪れ、夜な夜な快い戦慄を与えてくれたものは、馬蹄の下で悶えるスティーブンソンの盲目の海賊、友人を月に見棄ててきた裏切者、未来から萎れた花を持ち帰った時間の旅人、ソロモン大王の壺に幾世紀もの間幽閉されていた悪魔、あるいは宝石と絹の陰に癲癇を隠している、ベールを被ったヨラサンの予言者などであった。

その間、忍びがえしのついた鉄柵の向う側には何があったのだろう？　わたしから僅か数歩しか隔っていない胡散臭い店先とか、危険きわまりない荒地では、土地柄にふさわしい苛酷な運命がどのように展開していたのだろうか？　そもそも、パレルモとはいかなる土地であり、仮に美しかったとして、それは果してどのようなものであったのだろう。

こうした問いに、記録というよりも想像の所産たるこの書物は答えることを願ったのである。

一九五五年一月、ブエノスアイレスにて。

J・L・B

言明

わたしは思うのだが、エバリスト・カリエゴの名は我が国の文学の「目に見える教会（エクレシア・ビシビリス）」に属している。朗読のクラス、文集、あるいは国文学史といった、その慈善事業には必ず彼の名がかかわりを持つことになるからだ。また思うにその名は、こよなく真正かつ敬虔な「見えざる教会（エクレシア・インビシビリス）」に、心正しい人々の孤立した共同体にも属していて、それは彼の詩の慟哭の言葉に負うというだけではない。わたしは本書でこうした考えに根拠を与えようと努めた。

またわたしは、恐らく不当な恣意に基づくことになるであろうが、彼が再現しようと努めた現実をも考察した。当て推量ではなく、正確な定義づけによって話をすすめてみようと思ったのだが、これはむしろみずから危険を招くようなものであった。なぜかというと、「ホンジュラス通り」を挙げて、この名からたまたま想起されることに身をまかせる方が、くだくだしくそれを定義づけるよりはずっと誤ちの少ない――かつはるかに楽な――やり方だと思えるからである。ブエノスアイレスという主題に愛着をいだく者なら、そうした悠長な方法に苛立ちを覚えることもないであろう。このような人のために、拾遺の章をつけ加えておいた。

本書を著わすにあたっては、ガブリエルの懇切きわまる著作と、メリアン・ラフィヌールとオユエラの研究を利用させてもらった。その他、フリオ・カリエゴ、フェリックス・リマ、マルセリーノ・デル・マ

ソ博士、ホセ・オラーベ、ニコラス・パレデス、ビセンテ・ロッシの諸氏にも感謝の辞を述べなければならない。

一九三〇年、ブエノスアイレスにて。

J・L・B

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongboo